

令和2年度 入学式 理事長告辞

このたび入学されました新入生の皆さん、そして保護者の皆さま、おめでとうございます。今日のおめでたい日に、357名の新入生を迎えまして、金光藤蔭高等学校の入学式を挙行できますことは、この上ない喜びです。

本校は、金光教の教えに基づく建学精神をもって設立された、金光教ゆかりの学園であり、94年の歴史を重ねた、伝統ある学校です。今日から新しくスタートする新入生の皆さんの学園生活を、ここからしっかりと見守り、サポートしてまいりたいと思います。

今日のおめでたい日に際し、日頃思っておりますところを、お祝いの言葉に代えて申し述べたいと思います。

例えばの話ですが、赤ちゃんが泣いている声を耳にするのは、あまり気分の良いものではありません。こんなことを聞いたことがあります。

ある時、駅に着いた新幹線から、座席の間の通路を歩いて、何人かの乗客が降りていきます。その降り際に、通路ドア近くの座席に座っていた、赤ちゃん連れの若いお母さんに、苦情を言って降りて行った、男の人がいました。まだ若そうなスーツ姿の、サラリーマンらしい男の人でした。

確かに、一つ前の駅くらいから、赤ちゃんがぐずって泣いていました。お母さんは一生懸命あやしていましたが、なかなか泣きやんでくれませんでした。それで降り際に、ひとこと言ったようでした。「母親なんだから、車内では、ちゃんと静かにさせないといけないじゃないか」といったことだったのでしょうか。そんなことが出来れば、苦労はないのですが、この男の人は、赤ちゃんの泣き声を聞いて、まさに気分を悪くしたわけです。

ところで、同じ車両に乗り合わせた人の中には、この男の人と同じように、赤ちゃんの泣き声を聞いて、気分が良くないと思う人が他にもいました。それは、泣いている赤ちゃんが、かわいそうに思ったからです。赤ちゃんが泣くには、何か赤ちゃんなりの理由があるわけです。どこかが痛いとか苦しいなら、それこそ大変です。だから、赤ちゃんの泣き声の原因となる事柄が、何とか解消されて、赤ちゃんらしいかわいい笑顔に、一刻でも早く戻れるよう、神様にお願いするような気持ちだった、と言えばいいのでしょうか。

もうお分かりのように、この後者の人の感情は、苦情を言って降りた男の人が、持つ

た感情とは、全く違ったものでした。このように言えば、その男の人に非難が向くような形になりますが、だからと言って、何も男の人の非を、あげつらおうというのではありません。私たちは、今申したような、そのどちらの心も持っている、というのが本当ではないでしょうか。どちらも持っているのだから、どちらが飛び出すか分からないのです。外面（そとづら）と家庭での姿とが一致しない、ということと、よく似ていることですが、それが、正直なお互いの姿かも知れません。

私たちが、イガイガの心でなく、丸く清らかな心を土台に社会生活を送り、人としての責任を果たしていくためには、少しでも心を鍛えることが、求められると考えます。「鍛えると言うけれど、心なんて鍛えられるものなのか」と、疑問も浮かぶでしょう。ただ、可能性があるなら、それを試みる姿勢を持たせてもらいたいと、思うのです。

皆さんは、今日からこの学園での様々な学びをスタートされたわけですが、一人ひとりの将来へ向けた学びの土台として、本学園では「心の成長」という教育精神を、大切に考えてきました。

目には見えないものですが、皆さんの心の成長をいつも願っております。

そのことを申し上げて、今日の告辞といたします

令和2年4月7日

学校法人 関西金光学園理事長 湯川彌壽善